# ラーマクリシュナは死んでしまったのか

### 2016年3月20日

### 第181回シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

### スワーミー・メーダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

今日は「ラーマクリシュナは死んでしまったのか（Is Ramakrishna Dead?）」 をテーマにお話しします。

シュリー・ラーマクリシュナは祭壇に飾られる写真に過ぎないのでしょうか。人は生まれ、生き、死に、その後はもう戻ってくることはありません。霊媒師のように、死者の魂に語り掛けて呼び寄せることができる人がいますが、その魂は生き返るわけではなく、言わば幽霊としてやって来るのです。シュリー・ラーマクリシュナも、そのような肉体を離れた魂なのでしょうか。

シュリー・ラーマクリシュナは死んでしまったのか、それとも生きているのか。そして、今なお私たちを導くことができるのか。これから皆さんに、実際に起きたことをいくつかお話ししていきますので、きっとこの問いに対する答えが得られると思います。聖書を読んだことがある方は、イエス・キリストの復活をご存知でしょう。イエスは十字架にかけられましたが、のちにイエスの肉体は死から蘇ったと言われています。これは「復活」と呼ばれており、イエスの生涯の重要な部分です。その後イエスは信者らの前に何度も姿を現して、助言を与えました。

シュリー・ラーマクリシュナは1886年8月16日にコルカタ近くのコシポル・ガーデン・ハウスで肉体を去られました。亡くなられた時、伴侶のホーリー・マザー　シュリー・サーラダー・デーヴィーは泣き崩れ、痛ましいご様子でした。その時マザーが最初におっしゃった言葉は「ああマザー・カーリー、どうして私の元を去られたのですか」でした。「ああ、あなた」と夫を指す言葉を使わずに、「ああ、マザー・カーリー」とおっしゃったのは注目に値します。マザーはシュリー・ラーマクリシュナをそのように見ていらっしゃったのです。また、亡くなられて少しすると、シュリー・ラーマクリシュナは姿を現されマザーを慰めようしてとこうおっしゃったそうです。「なぜ泣いているのだね。私がどこに行ったというのか。私はただある部屋から他の部屋に移っただけだよ。私の肉体はいつも見えるわけではないが、私は存在しているのだ。」

シュリー・ラーマクリシュナがホーリー・マザーの前に姿を現されたのはこの時が初めてでした。このような例は他にもたくさんありますが、時間が限られていますのですべてをお話しすることはできません。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）は、西洋に行く前に行脚僧としてインド国内を遍歴していた時、南インドのある信者の家に滞在していました。当時スワーミージーは、1893年にシカゴで開催される第一回万国宗教会議のことを既に聞いてはいましたが出席すべきかどうか迷っていました。南インドにいるスワーミージーの崇拝者らは、ヒンドゥー教の代表としてスワーミージーこそが最もふさわしい人物だと訪米を勧めました。が、スワーミージー自身は、アメリカがどのような所なのか、行って何をすればいいのかまったく見当もつかなかったので、出席する気になっていないどころかむしろ行きたくないと思っていたのです。

ある晩のことです。件（くだん）の信者は、スワーミージーの泊まっている部屋から言い合う声が聞こえてくるのを耳にしました。信者は大変驚きました。その部屋にいるのは確かにスワーミージー一人のはずなのに、聞こえてくるのは言い争う二人の声でした。「そんなはずはない」と思った信者は、翌日スワーミージーにこのことを告げ、誰と話していたのか聞いてみたのです。

初めのうちスワーミージーは答えようとしませんでしたが、信者がどうしても知りたがったので、遂にこうおっしゃったのです。「師が私の目の前に現れて、宗教会議に行くようにと私を説得されたのです。」スワーミージーが拒んでも、師は「絶対に行きなさい」と繰り返し強く言われたそうです。信者が耳にしたのはこれだったのです。さらにスワーミージーはこう言われました。「私が人々の前でスピーチして師のメッセージを伝えることができるようにと、師がこの万国宗教会議開催の手はずを整えたのだから、お前は出席しなければいけないよ、と言われました。」

この話を信じるかどうかは皆さんの自由ですが、私は自分が聞いた通りにお話ししています。しかし実際に、スワーミージーはあの第一回宗教会議で「宗教の調和」について一度スピーチをしただけで、名を成したのです。これは、英国の雑誌『エコノミスト』に掲載された調査でも明らかになっています。それによると、宗教会議でのスワーミージーの最初のスピーチは、全世界でこれまでに為されたあらゆる人のスピーチの中で最も優れたものであると結論づけられていました。

ご存知の通り、スワーミージーは頼まれて講話を行いましたが、そのテーマは宗教だけでなくインドも対象でした。これは、キリスト教の宣教師らにとって、インドでの布教活動のための基金をアメリカの信者から募るのに不都合でした。こうした宣教師らは、インドを「暗闇から光へ」と導こうとしていたのですが、スワーミージーの姿を見てスワーミージーが語るのを聞いたアメリカ人は、このような傑出した人物を生む国を「暗闇から光へ」導くための寄付など必要ないと感じました。スワーミージーに深い敬意と愛情を示した宣教師もいましたが、多くはスワーミージーを疎ましく思い、スワーミージーを公然と批判したり罵ったりしました。中には、スワーミージーの死を願ってコーヒーに毒を盛った者さえいました。しかしスワーミージーは、コーヒーを飲む前に何かおかしいと感じ、またシュリー・ラーマクリシュナもスワーミージーの前に姿を現して「そのコーヒーを飲んではいけないよ」と警告しました。

このようにシュリー・ラーマクリシュナがいつもスワーミージーと一緒におられて、スワーミージーを守られ、スワーミージーに指示や安らぎ、慰めを与えられていたのを示す例はたくさんあります。

シュリー・ラーマクリシュナが自分の霊的な息子であるとおっしゃっていたスワーミー・ブラフマーナンダジーは、師の教えを編纂されました。これは後に翻訳され『The Words of the Master』という書名で出版されています。短い本ですが、ブラフマーナンダジーの編纂された書で、しかもシュリー・ラーマクリシュナの教えが詰まっているわけですから、とても重要な本です。さて、ブラフマーナンダジーが師のメッセージを集めている時、その中に本当は師の言葉でないものが混ざっていました。すると、真理を体現した御方であるシュリー・ラーマクリシュナがブラフマーナンダジーの前に現れて、こう言われました。「息子よ、それは私の言葉ではない、誰か他の人が言った言葉だ。」

ここまでで、ホーリー・マザー、スワーミージー、ブラフマーナンダジーが体験された数多くの例から、三つだけ皆さんにお話ししました。では、第二世代の僧侶ら、すなわちシュリー・ラーマクリシュナの直弟子の直弟子に対して師が姿を現されたという例はあるのでしょうか。ブラフマーナンダジーのある弟子が、まだ年若くブラフマチャーリであった頃の例をお話ししましょう。このブラフマチャーリには信仰も愛もありましたが、まだ多くの疑いも持っていました。これは、シュリー・ラーマクリシュナがすでに亡くなって何年も過ぎ、スワーミージーもベルル・マトを創設された後亡くなり、ブラフマーナンダジーがラーマクリシュナ・マト・アンド・ラーマクリシュナ・ミッションのプレジデントであられた時のことです。ラーマクリシュナ僧団の本部であるベルルの僧院では、毎朝僧侶らは本院の階段を上った中にあるシュラインに行って冥想と祈りを行うことになっており、このブラフマチャーリも他の僧侶と共に寺院に行っていました。

このブラフマチャーリは予てより、「肉体は亡くなられたけれどシュリー・ラーマクリシュナは間違いなくまだ皆と一緒におられる、すなわち生きていらっしゃるのだ」と先輩の僧侶やシュリー・ラーマクリシュナの直弟子から聞いていました。しかし、ブラフマチャーリはこのことに確信を持っておらず、それどころか、「こういう事を言っている信者や僧侶は確かにいい人たちだが、自分たちの思い込みに囚われた犠牲者のようなものだ」と理屈で片付けていました。ある時ふと、このことが頭をよぎったので、ブラフマチャーリは「もしシュリー・ラーマクリシュナがまだいるという証拠があれば信じてもいいけど、直に見せてもらわないとね」と独り言を言いました。

ある朝ベルルの本院で皆と一緒に瞑想していると、このことが頭をよぎり、「そうだ、もしシュリー・クリシュナの足輪についている鈴の音が聞こえてきたら、師はまだいるのだと信じてやろう」と思いました。なんと、ブラフマチャーリがこの考えに強く集中すると、本当に足輪の鈴の音が聞こえてきたのです。しかし、これは自分の思い込みに過ぎないのだと理論づけました。

しばらくたったある日、「自分だけではなく他の人も一緒に証拠を見聞きしたら信じてやろう」と考えました。翌朝、瞑想中に浮かんだ考えは、「このような朝早くから寺の中に魚売りの女性がやって来て、ある魚の名前を売り口上で叫んだら、シュリー・ラーマクリシュナがまだ私たちと一緒にいるんだと信じてやろう」というものでした。これは、非常に起こる確率の低い条件でしたが、その瞬間、魚売りの女性が来て、ブラフマチャーリの思った魚の名前を叫んだのです。その場にいた、食材の責任者の僧侶は、「皆の瞑想の邪魔をしてはいけない」と魚売りをたしなめました。すなわち、そこにいた僧侶全員が魚売りの言葉を聞いたことになります。ブラフマチャーリはこれを目の当たりにしました。

自分を抑えられなくなったブラフマチャーリは、大声で泣きながら本堂の階段を降りていきました。すると階段の下にブラフマーナンダジーの姿があるのに気付き、ブラフマチャーリはそばに寄って御足の塵を取りました。そこでグルであるブラフマーナンダジーは弟子を厳しく叱り、「試すのは、もうやめなさい！」と叫ばれました。「いい加減にしなさい！もう二度とシュリー・ラーマクリシュナを試さないと約束しなさい。」「はい、マハーラージ、もう二度といたしません」とブラフマチャーリは泣きながら答えました。

以上が、シュリー・ラーマクリシュナは亡くなられたのでもどこかに行ってしまわれたのでもなく、ただの写真でもないという証拠です。師はまだ生きていらっしゃり、いつでも私たちの前に姿を現して私たちを導き、困った時には救いの手を差し伸べてくださることができるのです。シュリー・クリシュナや、お釈迦様、キリストと同じく、シュリー・ラーマクリシュナは神様の化身であり、普通の人ではないのですから。